

卷頭言——書は言を尽くさず、言は意を尽くさず——

毎年、少なくとも四〇か所以上から、さまざまな内容の木簡が出土していくことによって、従来の研究では予想もできなかつたような事が明らかにされ、これまでの「常識」が再検討を余儀なくされ、史実がより具体的に知られるようになつてきている。あらためて地下から出土する文字資料の重要性が思い知らされる。会員諸氏も同様に感じられているに違ひあるまい。今年になつて奈良国立文化財研究所から『平城京木簡一』として「長屋王家木簡一」が刊行された。この「長屋王家木簡」についてはすでに『平城京長屋王邸宅と木簡』に一部が、あるいは『平城宮発掘調査出土木簡概報』として公表されていたとはいえ、やはり、特筆されるべきことであろう。この「長屋王家木簡」をめぐっては、家政機関の問題などすでに多くの研究成果が公表されているが、一点一点の木簡の意味するところを正確に読み取る作業はまだまだ残されているようと思える。今回の一巻には「宮跡庭園」出土の木簡四六点と「長屋王家」跡出土の木簡一六四一点とが収められているが、当遺跡から出土した木簡全体からすればごく一部に過ぎない。それにしても、あらためて図版と釈文を読み比べてみると、これまでの、一部を除いて釈文からのみ判断をせざるを得なかつたのとは異なつたイメージが湧いてくる。そのうちの一つは、すでに東野治之氏なども指摘していることであるが、ことばを文字で表記する経緯が推測されることである。これまでともすれば史料の文字（漢字）に力点を置いて読んできがちであった。しかしこれらの木簡からは、その文字の背後にことばが予想される。わたくしは、「子曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」という『周易』の一句を思い起こす。木簡（とくに「長屋王家木簡」）は書の背後に僅かではあっても言を示してくれているように思うのである。これまでも全くなかつたわけではないが、これはやはり木簡が新たに切り開いてくれた世界であるといつてよかろう。それと同時に、これまでにも滋賀県

野洲郡中主町西河原森ノ内遺跡出土の和文の木簡（七世紀末?）のように、識字層がかなりの広がりを持っていることが知られている。飛鳥などの木簡の出土遺構からの判断では、文字の始用時期はかなりさかのぼりそうである。これらは、『日本書紀』などからは予想しがたい、木簡が切り開いてくれた新たな世界である。「長屋王家木簡」など木簡の示してくれる世界は生きた文字の世界であり、そこから知られる事実に興味はつきず、今後の研究の一層の発展を望み、続刊に期待するところが大きい。

この『平城京木簡』の刊行は、また別の意味でも注目される。これまで奈良国立文化財研究所の刊行された木簡関係の史料は図版はコロタイプで、釈文は活版であったが、今回の『平城京木簡』は図版は高精細印刷であり、釈文もふくめて電算写植印刷という、新たな印刷技術が導入されていることである。従来の印刷方法では業者の廃業などで、それを維持していくことが年ごとに困難になってきていた。このような事情の中でリーダー的存在である奈良国立文化財研究所が新たな印刷方法を採用したことは、本会のあり方にとっても示唆されるところが大きい。

本号は、昨年九月に行なわれた新潟特別研究集会での報告も収めたこともあって、昨年と同様に、大冊になつた。創刊号が一三〇ページほどであつたのに比べると、二倍以上の厚さになる。直接編集を担当して下さつた幹事の方々に感謝したい。印刷方法も、図版は従来通りコロタイプであるが、本文の印刷は電算写植にして、新たな対応を試みた。とくに気がかりなのは釈文であるが、ご意見をお寄せ頂ければ幸いである。また、問題の会員数については今年度からの新入会員は一九名、来年度からも七名の新入会員を迎えることになり、すでに会員数三〇〇名という当初の最大限の会員数を越えている。会誌の編集とともに研究集会の持ち方などが、新たな検討課題として浮上してきているというべきであろう。

（佐藤宗諱）